
黒いドレスの女

文樹妃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒いドレスの女

【Nコード】

N3100F

【作者名】

文樹妃

【あらすじ】

雨の降る真夜中、高台の屋敷に住む黒いドレスの女を眺めるそれが修一朗の誰も知らない習慣だった。ある夜、女が彼を屋敷に招きいれたことから、彼の運命は変わっていくことになるのだった。

しとしとと細かい雨が降り続けている。

いつもこんな夜だ、この屋敷の前にやってくるのは。

高台に建つこの屋敷は、洋館、といったほうがいい風情のもので、白い壁と赤い屋根、大きな出窓が印象的な建物だ。

蔦のからまる様子も、高い木々がひしめく庭も、おおよそ明るい日差しの下では美しいこと極まりないのだろうと思わせる。

しかし、修一郎の通る真夜中には、その全てが正反対の印象をもたらしていた。

陰気　そう表現するのが自然だろうか。

傘を少しずらして見上げる修一郎の目には、高い壁とアンティーク調の大きな門に守られた屋敷が、闇の中で息をひそめて何かを待っているかのようにすら見えた。

待っている　いや、実際に待っているのは修一郎のほうだった。

「あ……」

薄明かりが灯された一つの窓を見て、思わず修一郎は声をもらす。三階の端の窓。真夜中を過ぎて明かりの灯る部屋。そこにいつも現れる女を修一郎は待っていたのだ。

レースのカーテン越しに見える人影が女であるのがわかるのは、その長い髪とドレスからだ。

腰のあたりまで波打つ長い髪と、黒いドレス。

時代錯誤な西洋風のドレスも、闇に浮かぶこの洋館にはなぜか似合っていた。

修一郎の手からくゆらせていた煙草が落ちて、水溜りの中に消える。そのことにも気づかぬほど、修一郎は女を一心に見上げていた。しばらく行き来する様子が見えた後、女はまた明かりを消してしまふ。わずか十分ほどの時間も、雨の中に佇んで見つめるには長い。

それなのに修一朗は門の脇に隠れるように立って、いつもそれを眺めているのだった。

この夜も見つめるうちに明かりは消され、修一朗のひそかな習慣は終わり、名残惜しげに息を吐いてから、ぴちゃり、と音を立てて彼は水溜りを乗り越えた。

初めはいつのことだっただろう。

ただ真夜中の散歩に出るのが好きだった。

人も車もあまりいない、静かな町並み。その中をゆっくりと歩くだけ。山間にできたまだ新しい住宅街は、駅前に商店や家々が集まっている。

その雑踏さえ抜けてしまえば、以前からあったのであろう古い家々が時折ぼつりと現れるだけで、静かな散歩が楽しめるのだった。

煙草をくわえ、外に出る。それはようやく購入したマイホームでの喫煙を禁止した妻の手前、仕方ない行動だった。

会社でのストレス、中学に入って生意気になった娘や世間では二トと呼ばれるのであるう息子との関係も頭が痛く、それを聞くどころか余計にうるさくわめきたてる妻からも離れて、唯一ゆっくりと一人になれる時間と化した夜の散歩は、日に日にその距離を延ばし、いつしか修一朗は街を抜けた高台までやってくるようになっていた。

女を見つけたのは、ひと月ほど前のことだったであろうか。

決まって雨の降る夜に三階の窓に現れ、晴れている日には姿を見せない。

なぜなのかわからないが、その不思議な行動が、余計に女の存在をミスステリアスに感じさせ、修一朗は惹きつけられていった。

週に数回だった散歩が回数を増やし、今では毎晩こうして外へ出てしまう。それも決まって妻や子供たちが寝付いた真夜中に出かけることにしていた。

ただ女の影を見ているだけなのだからやましいことは何もないはずなのだが、どこかに罪悪感のようなものがあるのかもしれなかった。

今まで商売の女を除いては、浮気の一つもしたことがないような生真面目な男　それが修一郎だった。

出世もしないが、取り立てて悪事もしない。そんな修一郎のことを妻は不満に思っているようだった。

来年には結婚二十周年を迎えるということも、感慨すら呼び起こさぬほど、家の中の空気は冷え切っている。

その表に出せない全ての鬱憤が、修一郎の足を洋館に向かわせるのだろうか。

陰気で不気味にすら思える屋敷に住む女　彼女は一体どういう人物なのか、黒いドレスを着て、どんな暮らしを送っているのか、勝手に想像を巡らせる。

夜の雨の中、覗き見をしていることに対する不思議な緊張感と罪悪感が入り混じり、なんともいえないスリルを感じる　修一郎はいつしかその時間を楽しみにするようにすらなっていた。

女がもしも醜悪な外見をしていたらどうなんだろう　そんな可能性が浮かんでくるも、修一郎はすぐさまそれを打ち消していた。

はつきりと顔さえ見たことはない。カーテンが時折揺れる時、ちらりと黒いドレスや髪の色が見えるくらいだ。

それでもなぜか、修一郎には彼女が美しい女であるような確信があった。

雨に打たれ、今にもたまった雫を落とすようにたわんでいる楓の葉　その下にかかった見事な蜘蛛の巣が目に入り、一瞬修一郎は瞳を細めた。

蜘蛛の姿は見当たらずなもの、雨粒の光った巣はいつそ芸術品と呼べそうなほどに美しかった。

そんなことを考えていた時だった。女がこの夜窓際に現れたのは、闇に慣れた瞳に淡い光が差し込む。

女が一つにまとめていた髪を解き、波打つ豊かな流れがあらわになる。いつもの黒いドレスが後ろを向いた時、カーテンが揺れて、滑らかな背中がはつきりと見えた。

途端に修一朗の心臓が音を立てた。

ドレスのデザインはいつも微妙に異なっていたようだったが、男の修一朗にとってさほど興味を引くこともなかった。

しかしこの夜の女のドレスは、背中が大きく開き、細い腰のラインすら辿れそうなほどに大胆なものだったのだ。

静まらない心臓と修一朗が格闘し始めたその時、カーテンが大きく開き、女が真正面に向いて立った。

修一朗のいる門は暗く、街灯すら遠くで瞬いているだけである。

まさかこちらは見えないだろう　そう思った修一朗は門の影に隠れようとした。

ところが女は　初めて見えた顔だった　くつきりと赤く紅を塗った唇を上げて、微笑んだのだ。

やはり、というべきか、想像していた以上に女は美しかった。

白い肌と黒い髪が対照的で、明かりのもとで浮かび上がるほどに女は輝いて見えた。

あまりの美貌に息を呑んだ修一朗の目の前で、女は直後に姿を消した。

そのことを残念に思った修一朗は、背を向けかけた門が、鈍い音を立てて開かれる音を聞いた。

驚きに振り返ると、そこにいたのは黒いドレスの女だった。

いつも見つめていただけの、幻であったかのような女が、微笑を浮かべて立っていたのだ。

「お茶をどうぞ　温まりますわ」

優しい声で目の前に湯気の立つティーカップを差し出されてなお、修一郎は夢を見ているような気分に陥っていた。

それも無理はないだろう　遠くから眺めていただけの女の屋敷に招かれ、目の前で微笑みかけられているのだから。

しかも間近で見ると、女は更に美しかった。

白く透き通るような肌はまるで上質の陶器のよう　その色を浮き立たせるかのような黒い髪は艶やかで、部屋の落ち着いた照明の下で光沢を放っている。

完璧といえるほどの体のラインを、黒いドレスが魅惑的に包んでいた。

人形のごとく美しい女の顔を見つめていた修一郎に、女が再度口を開いた。

「よかった　服は思ったより濡れてはいらっしやらないのね。それにしても……なぜ、傘も持たずにこのようなところへ？」

先ほど渡されたタオルを手に、赤い唇が動くのをぼんやりと眺めていた修一郎に、女は優しく微笑む。

その声の温かさに、やはり女は幻ではないのだと頭のどこかで考えながら、修一郎は再び自らに問う。

本当に、なぜ今日に限って傘を忘れたんだろう。いや、持つて出たのではなかったか。確かに家を出た時には、手にしていたはず……。

頭の中で自問自答を繰り返していた修一郎に、女は笑って紅茶を勧めた。

言われる通りに口に含んだ赤い液体は、とてもまろやかで甘かった。品のよい絵柄の入ったティーカップの紅茶を飲み干す頃には、既に傘を持って出たのかどうかなどと、どうでもよくなってくるのだった。

「雨が……本降りになってきましたわね」

カーテンを少し開いて、窓の外を女が見下ろす。静かな部屋に段々と叩きつけるように響いてきた雨音と共に、雨の匂いがどこから

か漂ってくる気がした。

通された部屋は三階の端で、確かにいつも女が立っていた場所だった。

いつも外から眺めていたこの部屋の中に、今女と二人で座っているのだと思うと、とても不思議な　それでいてなぜか心地よい気持ちになってくる。

屋敷の中に他に人の気配はなく、想像通り、女は一人で暮らしているようだった。

「これではすぐには帰れませんわね。雨がやむまで、音楽でもいかが？」

当然の流れであるかのようににっこりとそう言われて、修一郎は頷いた。

全てが西洋アンティークで揃えられた室内と調度品の中に、ひっそりと置かれたレコードを女が出してくる。白く長い指がそつと針を置いて、懐かしいような鈍い音が響きだす。

どこかで耳にしたクラシック曲が流れる間、女と修一郎はとりとめもない会話を交わした。

最近の天候に、この辺りの環境、好きな食べ物の話　全て、どうでもいいようなことばかりだった。

しかしなぜか彼女はよく笑い、修一郎もよく話した。女が自分で編んだのだと見せてくれたレース編みの膝掛けもタペストリーも、修一郎は大げさなほどに褒めてやった。

謎めいた女と屋敷　それを不気味にすら思っていたことを修一郎が馬鹿馬鹿しく感じた、その時だった。

突然激しい雷鳴が鳴り響き、部屋の中が真っ暗になったのだ。

「停電　？」

修一郎が呟くと、女が少し待つようにと言い置いて、ゆっくりと椅子から立ち上がった。

しばらくして淡い灯りが部屋を照らし、女が窓際で蠟燭に火を灯したのが見えた。

女が髪をかきあげ、黒いドレスの背中が再びあらわになる。

蝋燭の灯りで見る女の素肌はなまめかしく、修一郎は途端に胸が高鳴るのを感じた。

美しい女　雨宿りだと称して同じ部屋で時を過ごして気安く思えてきていた彼女が一体どういう人物なのか、この屋敷で一人どう暮らしているのか、それすらわからない。

若く思えたが、こうして薄明かりの下で見つめる女は、まるで熟した果実のような大人の女の匂いすら感じさせた。

修一郎が力を入れれば折れてしまいそうな細い腰を見つめながら、黒いドレスの下の素肌を想像し、思わず喉を鳴らしかけた修一郎はあわてて咳払いをした。

同時に轟いた雷の音がそれを掻き消してくれたようで、修一郎がほっと息をついた瞬間、女が背を向けたまま窓ガラスにそっと手を置いた。

「私、知っていたの」
何を、と修一郎が訊ねる前に、女はゆっくりと振り返る。

蝋燭の灯りを背にして微笑んだ彼女は、少女のように小首を傾げてみせた。

「ずっと見ていたでしょう、私のこと……灯りを消してしまえば、外に立っている貴方のこともよく見えるのよ」

いたずらっぽく赤い唇を舐めた女にどきりとしつつも、あわてて言い訳を考えた修一郎に、女は笑う。

「いいの　怒ってなどいないわ。むしろ……」

音もなく、光った雷に照らされ、女は瞳を伏せる。審判を待つような気持ちで黙っていた修一郎を再び見据えた女は、妖しいほどに美しかった。

「待っていたの、貴方のことを　貴方とこうして、共に過ごす時間……」

その言葉に修一郎は目を見張る。

まさか、そんな　月並みな驚きの言葉が浮かんでは消える。

二人の間の沈黙はじりじりと燃える蠟燭のように危つく距離をせばめていく。

無意識に、修一郎の足は動く。

気づいた時には窓際に立つ女のすぐ間際まで、修一郎はやって来ていた。

窓枠に背を預けながら、女は身動きもせず、修一郎を見つめている。

言葉もなく、女が赤い唇を開いた。

ゆつくりと、その唇が彼を呼ぶ　名前すら知らぬ間柄であるのに、なぜだか呼ばれたような気が、修一郎にはしたのだ。

ぎりぎりまで高まって抑えていた彼の中の熱が　理性が遠くへ弾け飛んだ瞬間、修一郎は女を震える手で抱きしめていた。

荒い呼吸の中で、修一郎は女のドレスを脱がせていく。

彼の期待にそぐわず、女の素肌はしっとり滑らかで、触れた途端に修一郎の残りの罪悪感もためらいも、全てを消し飛ばしてしまった。

赤い口紅すら根こそぎ落としてしまうほど激しい口付けを交わしながら、女をまさぐる。

女もそれに応えるように、きつく修一郎の背に手を回した。

何度も何度もぼりつめながら、共に声を上げ、寝台に沈む。静かな屋敷はもはや官能の空間と化して、修一郎の頭も麻痺させていく。

こんなに激しいものが自分の中にあつたことにも驚きながら、修一郎は女を思うがままに征服した。

獣のような声を上げる女を抱きながら、修一郎は思った　ああ、自分はこの瞬間を待っていたのだと。

いつも窓際に現れる女を見上げ、その謎めいた生活を空想したり、覗き見のスリルを味わったりしていた心の中にあつたのは、彼女に

対する欲望だったのだ。

頭の奥を妻や子供の存在がちりりとかすめたが、何度目かわからぬほどの情事の中で、もう何もかもがどうでもよくなっていた。

意識すら薄れていくほどの快感に支配され、轟き、光る雷も遠く聞こえるほどに興奮した修一朗の上に女がまたがった。

吸い付くような感触に身震いする修一朗を見下ろしながら、女が動く。

二つの美しい乳房が揺れる魅惑的な光景をぼんやりと眺める。

閉じかけた修一朗の瞳に、艶やかに微笑む女が映った。口紅が落ちてしまっても、彼女の唇は赤かった。そう、まるで鮮やかな血のように。

そして修一朗は遠のいていく意識の中で思ったのだ。

ああ、そうか……この瞬間を待っていたのは、彼女のほうだったのだ。

瞳を閉じた修一朗の唇を捕らえた女の、くぐもったような笑い声を、彼は確かに聞いたと思った。

遠くで光った雷に、レース編みのタペストリーが白く映し出されていた。

ところどころに残った水溜りをよけながら、主婦たちが歩いていた。

朝の明るい光が爽やかに高台の住宅街を照らしている。

雨が落とした葉を掃き、袋に入れていた中年の女が落ちていた紙に目を止めた。

「ああ、これ　まだご主人見つからないのかしらねえ、鈴木さんのお宅」

「本当よねえ、もう一週間でしょう？　失踪されてから」

「マイホーム建てたばかりだって言ってたのに　どこに行っちゃったのかしら。奥さんも残されたお子さんたちも気の毒に……」
「仲のいいご家族だったって聞いたけど　怖いわねえ」

眉を寄せ、囁きあう主婦たちは、吹いてきた寒風に身を縮める。

一人が舞い落ちてきた楓の葉を追って、顔を上げた。

赤い屋根に白い壁　大きな洋風の屋敷がそこにそびえたっている。

アンティーク調の門に寄り添うように立っている木の枝に張った蜘蛛の巣を見て、主婦は顔をしかめた。

「いやあねえ、このお屋敷も早く取り壊されなにかしら。もう何年も前から誰も住んでないんでしょう？　物騒だし、なんだか気味が悪くて……」

「本当よねえ、無人だと思って、こんなゴミなんか捨てていく人もいるんだから」

門の前に転がった骨の折れた男物の傘を嫌そうに見て、もう一人が大きく頷く。

そんな二人を見ていたもう一人の主婦が笑った。

「あら、知らないの？　もう取り壊しが決まったらしいわよ。この辺一体、壊して大きなマンションが建つんですって」

「そうなの　それなら安心だわ」

ほっとしたように笑いあった彼女たちは、またそれぞれに掃除道具を手に、屋敷から目を背け、また違った話題に花を咲かせ始める。
楓の木から赤茶色に枯れた葉が落ち、その下の見事な蜘蛛の巣が姿をみせる。

細い糸で張られた巣は美しく、残った雨粒をとどころにしがみつかせている。

巣の中央にいた黒い大きな蜘蛛が、まるでドレスのように広がった足を動かし、静かに姿を消すのを、もはや誰も目にすることはないのだった。

(後書き)

青蛙さま主催のBlack One Festival(12月開催予定)に参加するため書いた短編です。

初挑戦のダークホラー(風味。笑)ですが、謎を残したままの結末なので、皆様がどのような感想を抱かれるかドキドキです。

どんなコメントでもよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3100f/>

黒いドレスの女

2010年10月8日14時09分発行